

九州平戸地域における修験の歴史的文化的研究

邊 見 光 眞

一、はじめに

この研究は、今から二年前伝法院より依頼を受け、進めてきたものである。依頼の内容は、地方の宗教の独自性を明らかにする、というものであった。

平戸は地理的に日本の最西端地域に位置している。そして、このことがその歴史文化の独自性を形成している最も大きな要因の一つである。辺境の地でありながら、古代より海外との往来に最も近い位置を占めていた場所なのである。

中央から離れていながら、最先端の文化に触れて発展してきた体制は、当然中央に対してダブルスタンダードを取る。この姿勢が文化のみならず宗教に対してもかなり作用しているし、宗教自身もこのような性格を多分に持っていると思われる。

特にカクレキリシタンなど海外からきた神が、この地で生き残っているのをみれば、日本人の宗教的土壌の中で変容していったというだけではなく、辺境の地故の体制防衛の結果でもあったと思われるのである。

さて、平戸の総合的研究として、それぞれの分野でまとめ、シリーズにしたものは『平戸市史』（平戸市発行）である。平戸に関する歴史文化宗教自然など、ほぼ全領域にわたって網羅されている。

ただ、仏教に関しては古代中世の史料がほとんど無いことから、その研究はほとんどなされていない。個別的には福島邦夫氏『平戸安満岳縁起―近世初期松浦地方の山岳信仰』（長崎大学教養部紀要第三十七巻第一号一九九六年七月）『九州北西部離島における修験道―平戸諸島の修験寺院の歴史民俗学的研究』（長崎大学教養部―科研究成果報告書 平成八年三月）の研究があり、そこで新たな史料が紹介されているが、それも含め現時点では現存の史料は限界の状態である。

しかしながら、宗教の独自性を考える上で、平戸の歴史の中で仏教がどのように展開していったのか、特に古代中世はどのようなであったのかということについての研究こそが必要なのである。

真言宗智山派寺院に関しては、平戸地域における歴史も江戸以前については分からない。各寺院の古文書もほとんど無い状態である。このような状況の中で研究を進めるとなれば、数少ない、また既に知られた史料の中で、多少なりとも古代中世の頃のありようを推論していく、そして、そこで平戸の宗教の特徴を考えることが、与えられたテーマの大筋を押さえる作業となるであろう。

平戸の仏教の展開を考える上で、歴史的にも注目されるのは志々伎山と安満岳の両山（共に平戸藩の真言宗新義派―現在智山派―の本寺）である。

特に志々伎山は古代から知られている山岳信仰、海洋信仰の山であり、安満岳は白山信仰の山である。したが

って、この両山を中心に考察を進めるものであるが、共に修験が入っているであろうと想定されるので、テーマは「九州平戸地域における修験の歴史的文化的研究」として設定する。先行研究としては、先に挙げた福島氏の研究がある。

二、中世から近世にかけての両山

a 両山と智山派

現存史料は非常に少ないことから、当地域の真言宗（智山派）の歴史的研究はほとんどなされておらず、言い伝えによって知られる程度であった。しかし、平成八年、新たな史料として、福島氏が『休岳温知録〔1〕第九』の中の「安満岳縁起」「当山縁起口伝書」を取り上げ、その史料の紹介とそれに基づいて近世初期の安満岳、志々伎山の歴史的考察を行っている。福島氏は上記の資料に『安満岳末寺帳』（元禄五年 一六九二年）（松浦資料博物館蔵）を加え、整理する中で、次のように指摘している。

安満岳西禅寺は松浦家の強力な庇護のもとにおかれていたようである。中興開山善意の時代、慶長から寛永の頃（一六〇〇―一六二〇頃）松浦家の強力な指導の下に安満岳の再編成があったように思える。〔2〕

この指摘は、両山の山岳信仰、海洋信仰や智山派の歴史を考える上でも、大変重要な点である。

この時代は、中世的領主体制から近世的藩体制へと変化していく最終段階の時期である。領土的には、松浦家第二十五代隆信の時にほぼ最終的な平戸藩の領土が確定している。しかし、権力集中のありようは隆信の頃は、

まだ過渡期の様相を示している。一例として、ルイス・フロイス『日本史』（一五八八年）には、「ばあでれが、平戸領主につぐ身分のドン・アントニオ籠手田の配下をキリシタンにしようとした時、異教の根が残らないように偶像を焼いたところ、安満岳と志々伎山の住持が領主に詰め寄り、ばあでれを平戸追放にし、協会を焼き討ちにしようとした」事件が記録されている。その後、籠手田氏の平戸脱出など様々な事件を通して、第二十六代鎮信の時に、近世的中央集権が確立して、宗教統制もなされていったと考えられる。江戸期、寺社奉行の下に置かれる体制へと繋がっていくのが、安満岳の再編成の持つ意味である。そして、宗教統制の中で安満岳のみならず志々伎山も再編成され、真言宗新義派寺院という宗派が出現してくるのである。

その過程で、最も激的な事件は一六〇七年の勝音院（曹洞宗）焼き討ちである。その跡に談議所（最教寺）を建て、真言宗の学問所とするのである。この事件によって藩主の仏教寺院というものに対する権力が確定したといえる。

再編成以前の志々伎山及びその末寺四二坊は天台宗のようである。四二坊中最大の寺が福満寺であり平戸島の中腹にある。先ず、その寺を廃し談議所に持ってきて、真言宗とするのである。その後、志々伎山に円満寺を建て、真言宗に変えていくのである。再編成以前の志々伎山の末寺は平戸島の全域に及んでおり、それらの中の主な寺院が真言宗化するわけである。『諸宗本末帳』（延享二年 一七四五年）（松浦史料博物館蔵）には、本末十三ヶ寺が記されている。

ここにいう真言宗新義派とは智山派とみなされるが、厳密にはどの時点で智山派と言えるかは微妙である。江戸期の史料の中では真言宗の表記は出てきても智山派の表記は出てこないものである。真言宗として記録されている寺院は、現在、智山派であることと、明治八年に県に提出した『寺院明細帳』（長崎歴史文化博物館蔵）に智積

院を本山とするのが文献的には最初である。

b 両山と修験

さて、両山と修験との関わりはどのようなようであろうか。これについても、福島氏は次のように指摘する（『九州北西部離島における修験道』二五頁）。

平戸の里修験について研究された宮本袈裟雄氏は、安満岳、志々伎山と修験との直接的関係を想定しておられるが、管見の史料による限り、直接的な関係は出てこない。むしろ、当地区の真言宗寺院の総本山として、松浦家の支配のもとに安満岳西禅寺志々伎山円満寺があったようである。

近世初期における両山の分析から修験寺院としての両山は考え難いとする。確かに、江戸期においては修験との繋がりはないようである。しかし、真言宗（新義派）への再編成以前は、修験との関わりは想定され得るように思う。近世初期において、藩体制の中に真言宗（新義派）が取り入れられた時に、修験的要素と新たな新義派的要素とにきれいに整理されたのではないかと考えられるのである。

再編成以後の両山が真言宗新義派としてある姿は、江戸期の史料で『寺社役之記』（正徳五年 一七一五年からの記録）（松浦史料博物館蔵）の中に窺うことができる。この史料は未発表の史料で、内容は寺社奉行御城日記である。簡単な記述とはいえ客観的記述なので、寺院の動きがある程度浮かび上がってくる。

真言宗全般に関するものは一カ所のみで、論義の記述である。

同四日

同人

此間真言一派論義可被開召之旨被仰出其段申達置、今夕御膳迄談議所ニ而可被聞召等之処、御痛所被成御座、依之今夕七半過御城ニ而可被聞召旨被仰出、

一、今亥過於御居間真言一派論義被聞召候、人数

両山 談議所 金胎寺 廣前院

觀音院 印山寺 觀能寺 福満寺

寿福寺 本光寺 東漸寺 潮音院

修善寺 妙觀寺

志々岐山弟子自觀 談議所弟子帰嚴

金胎寺弟子昌春 安満岳弟子即傳

ノ十八人

両山談議所金胎寺廣前院觀音院右之人数御居間ニ而先ツ御逢被成候而直ニ御次之間ニ列座、其以後惣人数罷出、段々列座ニ而論義有之、

一、両山初右惣出家中於松竹間御夜食被下置、御茶迄被下、何茂退出

一、御前御上下着用

一、御年寄中寺社役羽織袴ニ而罷出候事

この記述は、享保八年十二月八日（一七二三年）、小隼人（寺社奉行）の記述で、第三十一代篤信が談議所で論

義を聞くはずのところ、痛みで夜亥の刻より御城で聞いたというものである。ここには、修験寺院の雰囲気はなく、真言宗新義派寺院として両山、談議所、それらの末寺、弟子等の出仕論議を行う整然たる姿がある。藩主は上下着用、年寄り、寺社奉行は羽織袴着用で聞いている。藩主等が聞くということは、平戸藩の真言宗新義派成立の事情が関係しているのかもしれない。

また、『寺社役之記』に、安満岳の雨乞いや寺の修理、両山への幣帛奉納の記述があり、費用は藩から支出されている。

こうした記述から、江戸期の両山は本寺として、また祈祷寺院、幣帛を奉納されるような神社を抱えたいわゆる社僧のいる大寺院の様子が浮かぶのである。

では、修験との関係はないのであろうか。そこで考えられることが、近世初期の再編成を通し、両山の機能が整理されているということである。想定している修験としての性格は別の寺院に移されたのではなからうか。

このような観点から修験寺院を見直してみると、海寺に注目される。熊野神社の別当寺院で志々伎山と安満岳を勧請している。平戸瀬戸を挟んで平戸港の真向かいの田平（九州本土側）にあり、海から直線的に上った所にある（明治期に廃寺）。江戸時代、修験寺院として機能しており『寺社役之記』の中に次のように記述されている。

正徳五年月四日

海寺代々入峰之節江戸へ罷越、御屋敷へ茂罷出、御機嫌相伺ヒ御祈祷之御守札指上来候。然共当海寺未江府
エ不罷越賄之。（略）

海寺は、代々大峰山へ入峰して江戸屋敷へその報告をしていたのであるが、正徳五年（一七一五年）入峰後江戸へ行つておらず、その処理が記録となつたのであろう。処理内容については、「江戸屋敷へ御機嫌伺いの願いを申請し、正月末に出船、三月十三日殿様に御目見し、首尾能く行きましたという報告を御年寄りへ行いました」というものである。

この海寺が、両山の修験的性格を担つたのではないかという仮説である。

c 両山と海寺

海寺については既に報告されているが、一応縁起をなぞつて、進めていきたい。

『海寺縁起』（松浦史料博物館蔵）は二本ある。一つは四丁のもの（延享二年 一七四五年）で簡略なものである（仮に四丁本としておく）。もう一つは九丁もの（宝暦三年 一七五三年、朱書き補足部分の歴代住職の最後が円光であり、その年代を記す）で、詳しく書かれている（九丁本としておく）。この二本は祭神に違いがあり、海寺も近世の再編成の流れの中にあつたと考えられる。四丁本では、熊野権現、英彦山権現、志自岐大菩薩を勧請している。九丁本では、熊野、白山、志自岐である。白山、志自岐とは、安満岳の白山権現と志々伎山の志自岐大菩薩である。

四丁本の祭神の方が古い形であろう。海寺末寺に佐志高野大窪山寿延寺がある。熊野三所権現を祀っている。熊野の三所権現は十一世紀末頃の成立とみなされている。そして、熊野信仰は英彦山や六郷山へ十二世紀後半に入り、この頃に九州各地に入ってきたとみなされている。寿延寺にもこの頃に伝わった可能性もあるが、中興重慶（一三八年頃）の時に変革があつたらしく、それ以前の開基年代など伝説的である。「寿延寺縁起」（松浦史

料博物館蔵)の中で年代が明確になってくるのは、建武二年(一三三四年)に英彦山の宝蓮上人が尋ね来て英彦山より山伏を下し住職としたと述べ、それ以前九十年は無住と述べている時点からである。佐志(松浦市)に、室町時代初めに英彦山派が定着したということである。また、文禄二年(一五九三年)に平戸領になると記されているので、この頃海寺末に組み込まれたのではないかと思われる。また、四丁本には「佐志高野 熊野権現 寿延寺 大窪山 中興開山蓮花院慶長八年相果」とだけ述べ、編成の跡を感じるのである。

さて、九丁本に従えば、縁起の内容は以下のようである。

瑞石山無量寿院海寺蓮池坊(の地)は上古は海で、陸となったものである。山中の巖に螭の跡があるのはその証拠で、瑞石山の山号の由来である。院号は無量寿仏の尊号からとり、坊号は古い境内に蓮池があったからである。

そもそも、海寺の開基は紗喝羅龍王の第四番目の姫宮建立の霊地である。摩訶陀国大王権現が日本に降臨するとき、龍女は川内の沖まで出向き、行向浦の浦上に熊野権現を勧請した。そこは下寺といい海寺の昔の知行地である。本社祭の後、海寺より行き祭りを執行していたが、(無)住の時怠り、海寺支配外となった。そして、印山寺の知行所となった。

紐指の入り口に、神福寺という今は荒れてお社ばかり残っているところがあるが、これは海寺の末寺である。

本社は熊野権現が日本へ降臨した最初(の地)である。両脇は白山と志自岐が相列して、三所権現という。代々の太守の崇敬の霊地である。白山志自岐勧請の理由は分からない。中古に伽藍が焼失して、開基年号も

分らない。

大宝二年に役行者が柴燈護摩を修し、今の宝前の脇に壇跡がある。役行者は阿弥陀像を彫り、堂を建て、中に安置した。

中興印山道可公は地方征伐の時、御祈願御參詣を度々なされた。その時の住持は一乗坊良尊であった。願いも叶い、ますます崇敬され、同宿のものも海寺末寺の住職になった。歳暮年始にもご祝儀を賜り、その時に武具の加持を仰せつけられた。

海寺の前の瀬戸は、平戸瀬戸の中でも最も流れが速い場所で、海難の多い場所である。もともと、海洋神として龍女が祀られていた。そこに熊野権現が勧請されたわけである。

海寺は熊野権現を祀るとはいつても、寿延寺と違い祭神は熊野三所権現ではない。熊野権現、英彦山権現、志岐大菩薩（四丁本）である。英彦山権現を勧請していることから、英彦山から熊野信仰が伝わった可能性もあり、英彦山派との強い結びつきが窺われる。下寺に知行地のある英彦山派の大きな寺院ではなかったかと思われる。

それが印山道可公（第二十五代隆信 一五二九—一五九九年）によって変革がなされ、海寺の性格ができていくと考えられる。そして、第二十六代鎮信によって修験寺院の権威がゆるぎないものとなっていく。九丁本は右の縁起内容に続いて、十三項目に分け個々の説明がなされている中、最初の項目に次のように述べている。

一式部卿法印公和州大峰ヨリ先達之山伏ヲ被召。為御武運長久御国家安全五穀豊穰柴燈護摩ヲ修行セラル。

又法印公御剃髪之節醍醐ニ良尊ヲ被指越、大峰ニモ為御代參入峰被仰付、帰院之時御札檜笠檜杖等マデ指上、今海寺代々為御吉例右之品上ケ傳フ。高麗御陣中へモ良尊供奉ス。御武運長久ノ御祈念相勤ム。良尊儀無男子ニヨツテ法印公御末子鬼法師君ト奉申ヲ良尊養子ニ被遊、社領二十石寺領百石御蔵米ニテ寄付シ給エリ。然ニ鬼法師君山伏ヲ被為嫌、依之日高信助家督ヲ継玉フ。良尊卒シテ後暫無住、印山寺同山貞盛法印預リト云。山伏看ヲ勉メ或真言宗輪番タリ。此時奇物大般若經ヲ印山寺エツカワス。譜代ノ下人皆公儀者ト成。其後法印公命ニ仍テ海寺古來妻体ノ山伏住持タル由、依之先住良尊之一族星鹿村ニ住ス玄泉坊光山ト云ヲ海寺住職ニ被召成。御先例之通御祈祷御祭修法ス。其上ナラス御領分中邪宗門ノ儀無覺束被思召、為国家安全玄泉坊相廻リ、牛王ヲ指シ勤修セシムヘキ由仰ヲ賜。

式部卿法印公とは第二十六代鎮信（一五四九―一六一四年）である。鎮信は上醍醐にて法印となるのであるが、その時に良尊が来ているのであるから、良尊は三宝院系に属しているとみてよいであろう。鎮信が大峰より先達山伏を呼んで柴燈護摩を修したということは、英彦山派から当山方への変換が既になされていたと考えられる。中興道可公という意味は、第二十五代隆信によつて大変革がなされたということであり、当山方への変更はおそらく隆信の時であろう。いずれにしても、海寺は領主隆信の支配下にある修験寺院となっていたから、それが良尊卒後に真言宗印山寺預かりとなつていくのである。

次に、修験寺院というものが、慶長及びそれ以降どのようなことを行つていたのか窺うことができる。ここでは藩主に代わつての入峰である。当山方では戦国大名を願主として入峰することがなされたから、そのようなことが（³）できることは修験寺院として当山派の正統な流れの中に位置していたとみられる。次に、第二十六代鎮信は

秀吉の朝鮮出兵に従い（小西軍に編入）、良尊をともない祈祷させたのであるが、第三項には「高麗御出陣之時良尊供奉シ、御船中ニテモ壇ヲ飾リ御祈念ヲ相修ス」と述べ船中で祈願をしている。ここには、海洋信仰を根本として、山伏がそれに携わっている姿がみてとれる。次に、海寺は妻帯の山伏であるということである。第二十五、二十六、二十八、二十九代と代々の藩主の信仰が厚い（第二、三項目）修験寺院が妻帯となると他の山伏寺院も、多くは妻帯していたのではないかと考えられる。次に、年中祭礼の他に、キリシタン対策として牛王宝印の護符を配布祈祷して廻るといふ命を玄泉坊が受けている。第二十六代鎮信の頃より海寺という当山方の修験寺院が地域に定着化し始めたということである。その他（の項目から）、代々の藩主の寄進やお歳暮（御祈祷の巻き軸）のための登城や、暮れから正月七日までの武運長久の祈祷、二月六、七日の大殿若、代替わりの江戸への挨拶などが述べられている。

さて、この『縁起』の中には、両山が勧請されたという以外、両山との交流が述べられているわけではない。仮に、両山が修験寺院としても、このままの内容が当てはまるわけでもない。直接的に結びつけるものはないのである。しかし、安満岳、志々伎山について考えるときに、手がかりは海寺が英彦山派から当山方へ変更されたということである。

d 安満岳と修験

安満岳末寺、志々伎山末寺は、明治の時点では智山派であることは確認できるが、それ以前は文献的には『諸宗本末帳』（延享二年 一七四五年）（松浦史料博物館蔵）に、真言宗として記載されているだけである。

近世初期の再編成は、一つの頂点が勝音院焼き討ちと談議所建立（慶長十二年 一六〇七年）である。このと

き、談議所の中興開山として長谷寺から空盛上人を招いている。『寺社役之記』では、論義が記録されているから、おそらく談議所建立時点で真言宗新義派への変更が内実をとまなうものとなったと考えられる。

問題は、真言宗新義派以前はどのようなようであったかである。先ず、『諸宗本末帳』真言宗安満岳本末の基となっている『安満岳末寺帳』をみてみる。そこに記載の寺院は、以下のようである。()の中は、各寺院の所在地域である。

(平戸) 安満岳、印山寺、廣前院、観音院、神能寺、(田平) 弥勒寺、神宮寺、(調川) 西福寺、(星鹿) 金泉寺、(佐志) 本光寺、(日宇) 松尾山、(今福) 善福寺、(相神浦) 西光寺、(生属) 修善寺、(大島) 金剛院、(江迎) 長福寺、(早岐) 浄漸寺、(中野) 妙観寺、(相神浦) 東漸寺、(江迎) 潮音院

東漸寺、潮音院は万治三年(一六六〇年)十二月二日に印山寺末寺に仰せつけられたと記述した後、「右二箇寺印山寺末寺、都合二拾箇寺七十年以来新地無御座候已上、元禄五壬申四月十六日安満岳、熊沢甚殿五右衛門殿」と述べる。寺社奉行熊沢甚五衛門へ提出したものであるが、七十年以来新しい寺院は建てられていないというから、一六二〇年頃には安満岳系真言寺院は体制が整え終わっていたといえる。

上記寺院の中、平戸島内の寺院は、安満岳を除けば、平戸城下の寺院であり、唯一安満岳のふもと中野に妙観寺があるばかりである。これらの十九の末寺は、平戸松浦氏の領地拡大と中央集権化にともなって安満岳末寺へ編入されていったのであろう。

これらの寺院の中、九ヶ寺(相神浦、日宇、早岐、今福、志佐、江迎、中野)には「天正十一年五月十八日之

「末寺帳ニ有之」と同じ記述がある。天正十一年（一五八三年）は鎮信時代である。相神浦、日宇、早岐、今福志佐は第二十五代隆信の時に平戸領となるから、安満岳への再編成は占領よりも遅れてなされたということである。

さらに、末寺寺院の中には官司として並記しているところが八ヶ寺ある。こうした神社を抱えている寺院は、おそらくは修験的寺院であったろうと考えられるのであるが、そのような寺院が安満岳へと吸収されるのである。「安満岳縁起」では、泰澄来山以前に熊野権現の飛来の話や、来山以後の白山妙理権現の使者の二羽のガラスが伊勢へ行く話や、天狗が天狗岳にて泰澄の法を聞き安満岳擁護を誓う話などが出てくる。

また、「当山縁起口伝書」には、白山権現三所六所王子三類眷属之事が記されており、熊野信仰が入っていたとみてよい。さらに、海寺が英彦山派であったとすれば、室町時代初期の頃には安満岳にも英彦山派が入っていたと考えられる。

安満岳は、白山信仰に基づく山岳修験の山であったとみなされているのであるが、「縁起」の記述の順序に素直に従えば、熊野信仰の山に白山信仰が入ってきたと考えてもよいのではないだろうか。修験流派的には室町時代初期頃英彦山派が入り、隆信時代には当山方も入っていたと思われる。そして、再編成の時に修験の機能無くされて、真言宗新義派にされたのである。再編成以前の頃は、英彦山派、当山方の修験者がいたのであろう。

また、武士集団にとっては神社は氏神でもあり、このような神社を抱えている新義派寺院の頂点として、隆信・鎮信によって支配体制の機能を付与されたのである。それは、平戸藩の中央集権化の為の体制作りであった。

e 志々伎山と修験

一方、志々伎山は鎌倉期には平戸島全域に及ぶ勢力を持っていたのであり、志々伎氏の支配であった。仲哀天皇の弟である十城別命（志々伎菩薩）を祀る式内社であり、鎌倉時代の頃には神仏習合して十一面観音を本地としている。『志々伎神社覚書』（明和八年 一七七一年）（松浦史料博物館蔵）には、数度の炎焼の時、正縁起は焼失し、開基の時代は分からないという。

平戸島は、古代は志式と呼ばれ、もともと志々伎氏の祖先が支配していたとみられている。松浦氏は、延久元年（一〇六九年）、松浦久が松浦郡宇野御厨検校となつて、松浦を姓としたのが始まりであるといわれる。その後、検非違使に補され、松浦郡の一部と壹岐を治め、その子供たちへ領地を割譲していく。これが松浦党となり、最終的には平戸松浦氏が松浦党の大部分を切り従えて平戸藩となる領域を統治するのである。

平戸松浦氏が平戸島を治めた後、志々伎山を再編成するのであるが、その時期などについて福島氏（『九州北西部離島における修験道』二十一頁）は次のように述べている。

志々伎神社には神光寺という神宮寺があつた。その事績は明らかではない。文永元年甲子（一二六四）には僧坊、宮寺の分院は四十二院を数えたという。その後、円満寺が寛永十一年（一六三四）宗陽公隆信の援助によつて、志々伎神社別当寺院として、頼弁によつて中興された。

真言宗への再編成は安満岳再編成以後であり、明らかに近世的中央集権への体制作りの意味を持つものである。そうすると、疑問は、なぜ安満岳への再編成はなかったのかということが生じてくる。これについては、志々伎

山は安満岳に吸収するにはあまりに歴史的にも支配領域的にも宗教的権威が大きすぎたからであると思われる。格が違いすぎたということである。最終的には、両山として真言宗新義派への再編成ということになったのである。

さて、志々伎山が真言宗への再編成以前はどのような宗派であったのかといえ、天台宗の寺院であったと考えられる。それを間接的ながらも指摘しているのが『廣前院旧記』「御目安謹言上仕候事」（寛永四年 一六二七年）（松浦史料博物館蔵）である。

廣前院とは、十城別命の臣下である七郎（分氏の嫡子）を祀る七郎宮の別当寺院である。藤田昭良氏の指摘⁵によれば、この七郎は中国の紹宝七郎であり、中国の航海神の平戸土着化とみている。それが、松浦氏の氏神となり、平戸で祀られるようになるのである。『志々伎家抜書』（寛政八年 一七九六年）（松浦史料博物館蔵）の中の「注進」（弘安七年―二二四年記述の写し）によれば、「七郎宮平戸守護神卜成給事」としてその縁起が述べられており、また、五島の神嶋には一宮に七郎と一隼（七郎の弟）を祀っていると述べている。弘安七年は、第十四代答（ことぶ）の時代であるが、松浦家が五島の小値賀島より平戸へ移るのは第十一代持（たもつ）（平戸松浦の祖）のときからであり一二二〇年の頃である。古代からの海外貿易の経緯を考えれば、持が平戸へ勧請したとみてよいのではなからうか。

『廣前院旧記』「御目安謹言上仕候事」は、廣前院が天台宗であったことを次のように述べる。

一 當所之別当坊ハ聖護院殿之御願所、昔ハ天台今ハ真言宗居候而、澄乗堯仙此之二代ハ志自岐山之末寺ト云ヒ、山上山下仕候ヘトモ今ノ專音ハ順果之下ニテ四度修行仕候間、於安満岳ニ致守頭出仕候

順果（安満岳―真言宗）というのは、『休岳尋録』の「安満岳縁起」の正本を写した（寛永五年 一六二八年）人である。この記述は、間接的ながらも志々伎山が天台宗であったことを窺わせる。志々伎山が真言宗となるのは円満寺からとみなされるから、その建立以前は天台宗であったと考えてよいであろう。『旧記』は聖護院の名前を出すのが、平戸島における聖護院派については、史料的に確認できずよく分からない。（『寺社役之記』には、聖護院派山伏の有無を尋ねる手紙に対して調べた結果、領内は聖護院派は無く、英彦山派だけであるという記述がある。）

また、明治の廃仏毀釈の時、志々伎山末寺の五島小値賀の長樂寺の懸仏（最教寺蔵）は十一面観音、毘沙門天、不動明王の三尊形式であるが、これは天台宗である六郷満山の地域で見られるものである。志々伎山も「注進」には十城別命を十一面観音、七郎を毘沙門天、一隼を不動明王としている。こうしたことから、平戸松浦氏による編成以前は天台宗の仏教が入り神仏習合していたのではないかと考えるのである。ただ、それがいつの頃だったかは、文献的には分からない。

修験との関係も文献的には分からないのであるが、次の史料からいくらかは想定され得る。『志々伎家抜書』の中の「注進」の社壇事（上宮分、中宮分、外宮分の堂宇が記述されている）に以下のような記述がある。

中宮分 礮邊ヨリ六町、上宮七町、但飛龍路中者六ノ岐一町獨一ナリ、有志名々ニヨリ如此

正殿一字 三間一面 本地十一面観世音 拜殿一字 六間 御共屋一字 三間

七郎殿社（一）字 一間 本地本地毘沙門天 一隼御殿一字 一間 本地不動明王

白山社一宇 一間 本地聖観音 拜殿二間 北山左右御前社一宇 一間 本地薬師如来(以下略)
 (アンダーラインと()の中は筆者による)

七郎殿社の横に書き込み「平戸九里八丁社立但中ヲ飛龍地路ナリ」、一隼御殿の横に「九品九里ハ八葉蓮臺ト申」がある。平戸と神島までの路であると考えてよい。北山左右御前社は、外宮分に御前社とし「平戸へハ九里八町立但中者飛龍路ト云」と書き込まれている。『諸宗本末帳』志々伎山円満寺末に「明川内 清安寺 四十二坊ノ其一 北山大明神ノ宮司、本地薬師如来、文永元年ヨリ延享二年迄四百八十三年」とあり、北山左右御前社は弘安七年には既に平戸にあったと考えられる。また、『諸宗本末帳』志自伎山多聞院円満寺の説明には、度々の火災による由来焼失の後、文永元年(一二六四年)に僧坊の数四十二坊を書記したとしている。

そうなると、問題は白山社である。第十一代持が平戸へ移る以前、志々伎氏の勢力は平戸島全域に及んでいたわけであるから、白山信仰がある平戸島一番の高い山が志々伎山の勢力下にあっても不思議ではない。しかし、それならば行程の書き込みがあってもよさそうである。しかも、本地を聖観音(キクリヒメノミコト)としている。古代からの海の道を考えれば、志々伎山へ白山信仰が入つていたとみるべきであろう。「注進」に記載の白山社は安満岳のことではないとすると、鎌倉期、安満岳は白山信仰はまだ入っていないかかったことになる。安満岳の場合、白山信仰が入るのはかなり後世のことではないかと思われる。

白山信仰は修験と結び付いているから、それを受け入れた志々伎山も修験化する、あるいは修験化していたと考えられる。ただ、修験寺院とはいっても、山岳信仰から発展した、志々伎山派とでもいうような地域独自ののであろう。

志々伎山は、もともと山岳信仰且つ海洋信仰の山として信仰され、志々伎氏の祖先によって祀られていたものであろう。そこに山岳修験が結び付き、さらに志々伎山の勢力拡大と相俟って、志々伎氏を頂点とした平戸島山域にわたる天台宗と結び付いた修験の一山組織を形成していったと思われる。

安満岳と違うのは、祭司且つ領主が神仏習合の中心にいる点で、組織化は最初から決められていた方向であったといえる。

三、海洋信仰と両山・海寺

両山の真言宗への再編成以前の歴史を推論していく中で、熊野信仰や英彦山派の広がりや当山方の導入、志々伎山の天台系修験の一山組織ということがいくらか見えてきた。そして、志々伎山と安満岳と海寺はそれぞれに歴史も性格も異なっていることも分かってきた。

では、それらの寺院に通底しているものは何であるかといえば、海洋信仰である。しかも、航海信仰の性格がかなり強いものである。そして、この海洋信仰は消えることはないが、平戸藩の成立まで、歴史の状況にしたがって、輝きに変遷があるのである。

志々伎山の海洋信仰については、『平戸市史』などに既に論じられているのであるが、ここでは志々伎山と安満岳と海寺の海洋信仰の性格についてあらためて見ていくことにする。

志々伎山は古代にも中央に知られた海洋信仰の山であった。それは、福岡県糸島市にある志々伎神社の『氏神志々伎神社明細記』（明治二五年）（志々伎神社蔵）の次のような記述から知られる。

皇ノ御宇太宰府觀世音寺御創建ノ時其本尊ニセムトテ百濟国ヨリ阿弥陀ノ像ヲ船ニ積テ渡リケル時海中波風烈シク船覆リナントス船人畏レテ志々岐山ノ御神ヲ船中ニ勸請シテ無難ヲ祈リケレハ難ナクシテ久家村香月ノ濱ニ着ク依テ其神靈ヲ可也山ノ麓神島ニ御社ヲ立テ祭りシト云

これは、白鳳元年（六七二年）に平戸の志々伎神社を可也山の麓神島（糸島市志摩町御床）に勸請した謂われである。

遣唐使船の航路について、白村江の戦い（六六三年）以前は北路であり博多―対馬―朝鮮経由の航路と博多―五島（志々伎山海域）―対馬―朝鮮経由の航路がある。白鳳元年の頃には、遣唐使船乗組員にとって志々伎神社は航海安全の神として既に知られていたことになる。南路になつてからは、その海域で航海神としての重要性は増したであろうし、遣唐使船廃止後も中国から来る貿易船にとって志々伎山は平戸島支配の志々伎氏の本拠地であるから海路の重要拠点であつたはずである。

また、このような海洋信仰の神は外国に直面しているから、国の防衛の性格を持つのも当然である。「注進」の年中行事の後に「此他為異国降伏大般若經転読」とあり、元寇の時は大般若を転読したのである。

志々伎氏が平戸を支配していた時代は、志々伎山は海洋信仰の山として、また貿易拠点として重要な位置を占めていた。しかし、平戸松浦氏が平戸島を支配するようになると、海外貿易の流れは平戸の方へ流れが変わる。平戸港が次第に整備されていき、第二十五代隆信の時に明人王直（倭寇の統領）を平戸港市に迎え入れて、平戸港市と結び付けた東シナ海の貿易路ネットワーク（平戸、五島、鹿児島、中国沿岸、呂宋、暹羅、マラッカ）が形成され、貿易によって潤っていくのである。ポルトガル貿易もこの王直の貿易路によつてもたらされてくる。

平戸の歴史は、海外貿易の歴史でもあるのである。

安満岳にも、海洋信仰は向けられる。『平戸安満岳縁起』（長崎教養部紀要第37巻第1号 五頁）の中に次のような記述がある。

神宮皇后百済国征討時軍船数四十八艘也。諸神評議依住吉大明神一神四十八神化四十八艘楫取定給。我當山伊弉諾尊御船先船定給。

神功皇后の朝鮮出兵にまつわる十城別命の縁起が下敷きになっていることは明らかである。先船の伊弉諾尊即ち白山妙理大菩薩を十城別命になぞらえているのである。また、千光院の葉上僧正（栄西）が渡唐の時に香合の中に妙理菩薩を勧請したといい、航海神の性格を強調している。つまりは、志々伎山と同じような性格が付与されているのである。ここで、注意を引くのが住吉大明神である。日本の航海神であり、日本と中国との海上交通が盛んであったことが縁起に反映していると推察される。

しかし、安満岳の性格は、海洋信仰の山としてよりは、平戸島北部と平戸島以外の平戸藩の真言寺院の本寺としての機能が優位に立っている。これは、近世大名としての中央集権確立過程とその後の藩としての中央集権機能の働きによるものである。

第二十五代隆信第二十六代鎮信の時代、切り従えた領地には神社を抱えた寺院があり、志々伎山も神社を抱える平戸全域に組織を持った天台系修験寺院であった。このような寺院が近世的な権力組織の枠組みの中へ入り変貌していくのである。組み込みには新しい枠が必要である。そのときの新しい括りの枠が真言宗新義派であった。

それによって、両山を藩の権力下に取り込み組織化できたのである。そうなれば、両山は新義派の本寺としての役割の働きが正面にでて、海洋信仰はある程度背後に回るようになる。

一方、海洋信仰と修験との結び付きを正面に出した寺が海寺である。この寺も再編成され、当山方となる。文禄の役に良尊を同行し船中祈願をさせるが、これは鎮信の率いる松浦水軍の行為であり、海寺の海洋信仰の性格をよく示している。鎮信が藩の権力下に海寺を置いたとき、両山とは異なった役割を担わせたと考えられるのである。

もともと海寺は竜神を祀る神社であり、平戸瀬戸の一方の端にある。四十km向こうのもう一方の端が志々伎神社である。この航路の最も危険な場所を守る海寺に、古代から有名な航海神である志々伎菩薩を勧請することは自然なことといえよう。しかも、平戸港の外側を見渡せる位置にある。第二十五代隆信第二十六代鎮信にとつて、大航海時代の正に海洋信仰寺院なのである。

四、平戸地域の宗教の独自性―まとめにかえて―

平戸の仏教は古代中世はどのようなかということについて、両山に海寺を加えて考察してきた。それらは修験寺院といっても歴史も性格も異なっているのであるが、それらの基底にあるものは海洋信仰である。

船に乗る者にとつて利潤の追求と自己の命とは同じものである。それを守ってくれるのが航海の神である。また、漁民にとつても舟を使えば、魚を捕ることと自己の命は同じものである。彼らを守るのも海の神である。海で生きる者の信仰は、常に自己の命と直結している。そして、そのような神はどこに居るのかといえれば、海を見渡す山に居る。本来、山そのものが神なのである。山は航海する船や魚を捕る舟の命綱であるからである。

海洋信仰の山は常に恩恵をもたらすものであるが、山であるが故にそこに住む民にとっては祖霊の居る場所でもある。祖霊から恩恵を受ける信仰は、海の民にとっては海洋信仰そのものである。

平戸において史料的に航海信仰が確認できるのは、初期の遣唐使からであるが、それ以前からの朝鮮との往来は想像に難くない。古代から世界と繋がる交易海道であった。勘合貿易、倭寇、朱印貿易、ポルトガル貿易、オランダ貿易、イギリス貿易と日本の海外貿易路の最先端に平戸は位置していた。

そのような中における海洋信仰は、命を賭して海を渡って行く者が持つ現世利益を本質とする信仰なのである。海で生きる者にとって、航海の安全や海の生業を守る神は何者にも勝る者である。それは、来世の往生を願う信仰ではなく、現世における命の救済を願うものなのである。

さらに、紹宝七郎の土着化にみられるように、海外の神でも守ってくれる力が優れているならば、受け入れているのである。それは、自分たちにとって有益な神ならば、積極的に海外の神をも取り入れることのできる宗教土壌が形成されていることを意味している。命と直結した現世利益の、ある意味極致とも言える信仰が、平戸の海洋信仰である。

また、それは熊野信仰にも影響していると思われる。平戸には熊野信仰が入っていると考えられるが、平戸に補陀落渡海はないのである。観音浄土を目指すのではなく、利潤を求めて中国へ行くのが平戸の海である。近世初期、熊野神社別当寺院海寺の僧が乗る船は、渡海舟ではなく朝鮮を攻めるための軍船であった。世界へ繋がっているメイン海道は観音浄土への道とは全く性質が異なっているのである。

海外の国に直面する海洋信仰の山は、海の民の命を守るだけでなく、同時に国の防衛機能を持つことになる。さらに、中央から辺境に位置するという条件が加わって、自分たちの独立性が意識されていくことになる。

海洋信仰に基づいたこのような性格を、この地方の宗教は基本的に持つていると考えられる。

註

(1) この史料は現在紛失し、福島邦夫氏（長崎大学）の翻刻したものしか見ることができない。ただ、『聖教史料撮影目録第四卷』（真言宗智山派宗務庁発行）に『休岳尋知録第一』のみがある。意味から判断して、ここでは『休岳尋知録』と記す。

(2) 『九州北西部離島における修験道』八頁

(3) 関口真規子『修験道教団成立史―当山派を通して』勉誠出版十二頁

(4) 『九州北西部離島における修験道』四頁

(5) 藤田昭良氏（天理大学）「東アジア地域の航海信仰と平戸」平成22年11月7日、シンポジウム「平戸―海外に開かれた自由な港市」口述発表

〈キーワード〉

志々伎山 安満岳 修験 海洋信仰 山岳信仰